

2024年12月15日 待降節第3主日礼拝メッセージ

「聖霊によって、神によって」

牛田匡牧師

聖書 マタイによる福音書 1章 18-23 節

ルカによる福音書 1章 26-38 節

今から2週間前の12月1日の朝、7時頃だったでしょうか。まだまだ陽が昇って間もない、朝の寒い時間帯に、JRと南海電鉄・新今宮駅前にある「(旧)あいりん労働福祉センター」に、大阪府市の職員らがやって来て、2019年に閉鎖された後、そのシャッターの周りで野宿していた人たちを「不法占拠者」として、強制的に退去させる「強制執行」が行われました。職員らが数百人規模で、約8時間半かけて、野宿されていた方々の所持品や放置されていた家財道具などを撤去したそうです。先日、私も釜ヶ崎に行ってみました。センターの周りにうず高く積みまれている家電や材木、テントなどは全て撤去され、工事現場にあるような高いフェンスで覆われてしまっていました。

5年前のセンター閉鎖の時もそうでしたが、今回の件についても、行政と生活者の方々との話し合いがうまくいかず、大阪府は2020年に立ち退きを求めて大阪地裁に提訴し、立ち退き命令が出されていました。生活者を支援する側は控訴し続けていましたが、22年には2審・大阪高裁でも大阪府を支持する判決が出され、さらに今年の5月には最高裁で上告が棄却され、判決が確定していました。そのために、「いつか強制退去が実行される」とは言われていたものの、まさかこの寒い12月の、しかも日曜日の朝7時から、突然行われるとは、誰も考えても見ていませんでした。閉鎖されたセンターのわずかな軒下という路上で生活さざるを得なかった方々には、それぞれ様々な理由がおありなのだろうと思います。私たちも時々、教会で作ったおにぎりを手渡しに行っていた方々。あの方々は強制退去の後、一体どこに行かれたのでしょうか。生活の拠点、帰る場をまた奪われてしまって、途方に暮れておられるのではないかと心配になります。

その釜ヶ崎での「聖書を読む会」の中で、参加者の一人が言われました。「今は、町の中でもクリスマスソングが流れて、華やかな雰囲気がある。でも、世界では戦争が続けられているし、釜ヶ崎では食べる物にも寝る所にも事欠く人たちがいる。この目の前の現実を目をつむったまま、教会でも『クリスマスおめでとう』『イエス様は私たちのために生まれて下さった』とだけお祝いしているのだとしたら、頭がおかしいとしか思えない」……。昨年10月から、パレスチナのガザ地区では、イスラエル軍からの爆撃が続けられ、まさに地上の地獄と化しているとの報告が届いています。昨年12月のクリスマスに、ガザ地区にある教会では、あえてクリスマスの礼拝を持たなかったそうです。家という家、建物という建物が破壊されてガレキとなり、上下水道も電気もなく、医療はもちろん、屋根も食べ物も、トイレにも事無く環境の中、イエス・キリストがお生まれになった「クリスマス」は、一体どこにあ

るのでしょうか。

教会でも保育園でも、2000 年前のクリスマスの様子をお人形たちで並べた「クリブ」を飾っています。また保育園の子どもたちはキラキラの衣装を身につけて、一生懸命に「ページェント(生誕劇)」を演じてくれています。クリスマスの行事、風物詩として、それらは私たちの心を温かくさせてくれますが、2000 年前の「本当のクリスマス」は、果たしてどのようなものだったのだろうか、と考えさせられます。

私たちの教会では、来週の 22 日にクリスマスの礼拝を持ちます。今日はその前週ということですから、イエス様の母となった乙女マリアへのいわゆる「受胎告知」のお話を、「マタイによる福音書」と「ルカによる福音書」の 2 つの福音書から読みました。マタイでは夫ヨセフに天使が現れ、ルカではマリアに天使が現れています。保育園の子どもたちが演じる「ページェント」では、天使がやって来て「おめでとう、マリア。あなたはもうすぐ赤ちゃんを産むでしょう。あなたは、神の子イエス様のお母さんになりますよ」「まあ、嬉しい」となるわけですが、実際に女性が経験する妊娠と出産というものは、もちろん、そんなに簡単なものではありません。しかも、それが通常の結婚による妊娠・出産ではなかったとしたら、その苦労はなおさらだったということは想像に難くないでしょう。

福音書によると、マリアとヨセフは婚約していました。ナザレの村というのは、近年の発掘調査などによると、人口が大体 400 人位だったのではないかと考えられています(山口雅弘『イエス誕生の夜明け』)。当時は、家族の人数も多かったでしょうから、村全体で 50 世帯や 60 世帯くらいだったでしょうか。要するにみんなが顔見知りでお互いの家族のことも良く知り合っている、いわば筒抜けのような共同体だったわけです。そのような中で、自分が関わっていない所で婚約者が妊娠したということを知ったヨセフは、「マリアのことを表沙汰にするのを望まず、ひそかに離縁しようと決心し」(マタイ 1:19)しました。ですが、そもそもそんなにも小さな集落の中で「ひそかに」離縁するなんてことは出来なかったでしょうし、「表沙汰に」ならないで済むなんて有り得なかったでしょう。それこそ、マリアの妊娠をヨセフが知ったのも、マリアから告白されたか、もしくはマリアから相談を受けた近しい人から伝え聞いたか、どちらかしか有り得ませんから、彼が離縁を考えていたというのは、マリアを守るためではなく、自分自身を守るため、自分の家の面子を守るためだったということが分かります。「婚約中の身でありながら、婚外妊娠するなんて、罪深く汚れている……」、そんな冷ややかな目が村中から、マリアに対して向けられていたのだらうと思います。

「マタイ」と「ルカ」の2つの福音書に記されている共通点は、次の3点です。「①イエスはマリアの子。②マリアはヨセフと婚約中に妊娠した。③ヨセフはイエスの生物学的な父ではない」。紀元1世紀に実際のこの地上を生きて歩まれたイエス様

や、その母マリアと出会った人たちが、語り伝えて行ったことは、以上の3点だったと考えられます(山口里子『命の糧の分かち合い』)。婚約中にも拘わらず、夫となるヨセフ以外の子を妊娠し、隠そうにも隠し切れない。家族からも親族からも、村中から「汚れた罪人」として冷ややかな目で見られ、後ろ指を指されるという境遇。少し考えるだけでも、とても辛い境遇だったと思われます。当時の女性たちの結婚年齢は、14歳頃と考えられていますから、マリアもまだ中学生くらいの年齢だったのでしょう。「どうしてこんなことになったのか」「これから自分はどうしたらよいのだろうか」と悩みに悩み、途方に暮れていたことでしょう。そのような絶望としか思えないような中で、希望が全く見出せないような中で、天使が現れて告げました。「聖霊があなたに降る」(ルカ1:35)、「マリアに宿った子は聖霊の働きによるのである」(マタイ1:20)……。

これらの「聖霊によって」妊娠したという言葉が、いわゆる「処女降誕」「処女懐胎」という神の子ならではの奇跡的な妊娠の物語として理解されて行くのは、マリアとヨセフの出来事から100年200年後の2世紀3世紀になってから、「教会の父」である「教父」と呼ばれる学者たちによってです。ですが、聖書以外の当時の神話や伝説、伝承の中にも、神々や英雄、偉人は通常ではない特別な結婚・妊娠・出産を経ているという文学的な表現手法が用いられることは、よくあることでした(山口里子『新しい聖書の学び』)。ですから歴史的には、恐らく未婚の少女マリアは、性暴力の被害者となるなど、予期せぬ望まない形での妊娠をしたということだったのだらうと思います。けれども、婚約者のヨセフは悩んだ末に、マリアとそのお腹の中の子どもを、自分の子として育てることを決断したのでしょう。その結果、イエス様自身、村の中でも親戚の中でも、「ヨセフの子」とは呼ばれずに、「あのマリアの息子」(マルコ6:3)と蔑まれ、後ろ指を指されて呼ばれるようになりました。またヨセフもマリアも「汚れた罪人の夫婦」として差別され、暮らしていたナザレの村はおろか、一族の本家があるベツレヘム、つまり親戚がたくさんいるはずのベツレヘムでさえも、出産直前の大きなお腹を抱えていた妊婦であったにも拘わらず、どこにも居場所が与えられなかった。それ程までに除け者にされ、周縁に追いやられてしまっていたわけですから(本田哲郎『小さくされた人々のための福音』)。

それにも拘わらず、そこにこそ「神が共におられる(インマヌエル)」、その妊娠は神が働いたが故のもの、聖霊によるものに他ならないのだと、聖書は伝えています。「全てに見放され、絶望しかないような状況の中でも、神は決して見放さない。いや、全てから見放された絶望の状況の中にこそ、神は今ここに共におられる。今、私に働いて下さっている。私は今、神によって聖霊によって生かされている」……。そのようにマリアとヨセフは感じ、力付けられたのではないかと思います。

またマリアとヨセフの夫婦は、イエス様を無事に出産された後も、「男の子の赤ん

坊は全員殺せ」という王様の命令があったために、赤ちゃんイエスを連れて、エジプトに避難し、難民生活を余儀なくされました(マタイ2章)。「そんなにも厳しく辛い現実があることがあらかじめ分かっていたのであれば、そもそも出産しない方がよかった。これは自分たちの計画、希望ではなかった」とヨセフとマリアは考えたかもしれませんが。けれども、神様の計画は人間の考える計画とは異なっていました。そのような辛い現状だからこそ、そこに紛れもない命の神が共にいて、今も生きて、働いておられるのだ、と聖書は告げているのだと思います。

いつの時代にあっても、妊娠と出産というのは、人間の力を越えた奇跡、命の神様が直接働いて与えられる恵みです。先日、助産師さんから伺ったお話の中では、「あなたや私という一人の命が、受精卵となり赤ちゃんとして生まれて来る確率は、あの大きな海の中に落とした1円玉を見つける位に難しいこと、ほとんど0に等しい奇跡なんですよ」ということでした。日本でも昔から「子宝」と呼ばれ、「子どもは天からの授かりもの」と言われてきたのも、まさに「聖霊によって、神によって」与えられた命を表すのに、ぴったりの表現なのだと思います。ですが、その一方では、望まない妊娠・出産によって、生後0歳0日で遺棄・育児放棄され虐待死する赤ちゃんが、またそうせざるを得ない状況にまで追い詰められている母親たちの状況が、今も依然として続いています。世界各地で続けられている戦争もそうですが、命を傷つけ奪う暴力が続けられています。それらのことを考える時、「どうしてこんなことが続けられているのか。神様は一体どこにいて、何をしているのか。神様がいるなら、止めて欲しい。命の神は、全ての命を愛しむ(知恵の書 11:24-29)のではないのか」と思わずにはられません。私たちの疑問、人間の疑問や訴えは尽きません。しかし、神様は天上界から一気に降って来て、戦争を終結させたりすることはありません。もしも、そのような仕方での世界に関わって来られる神であれば、わざわざクリスマスに、人間として、しかも一番弱く小さな赤ん坊の姿で生まれて来る必要がありませんでした。

クリスマスに神が人となった。それも赤ちゃんとしてお生まれになった。しかも、汚れた罪人と見なされた両親の下、婚外妊娠の罪の子として、お生まれになった。そのことが意味しているのは、そのような小さくされている人たちの現実の中にこそ、神が共におられるということであり、またそのような人間の手を介して神は働かれるということなのだと思います。言い換えれば、人の手を通さずに神は働かれることはないということです。

「聖霊によって、神によって」生かされ、そして神の子をお腹に宿したマリアは、今どこにいますでしょうか。今も恐らく、ベツレヘムへの旅の途中かもしれません。神様から命を与えられて、今日も生かされている私たちは、この命をどこで、誰と共に、どのように用いていくか。生かされて行くか。その問いを胸にしなが、私たちはクリスマスまでの1週間を、歩み出して参ります。